

### 第3回特別支援教育在り方検討委員会（意見交換）

会長

前回「特別支援教育を受けた子どもたちに育ってほしい姿」につきまして話していただきました。今回皆さんの発言をまとめたものを配っています。こういった子どもさんの姿をイメージしながら今後の議論をしていきたいと思います。

可能な範囲内で今回出ました子ども像を提言の中に入れていきたいと思います。

教育ビジョン21との整合性もあるので、提言にどう盛り込んでいくかについては今後の検討としたいと思います。ただ、今は皆さんから寄せられたイメージを大切にしながら進めていきたいと思います。

議題1

事務局

特別支援学校の地域と連携した取組について説明

会長

特別支援学校の地域との連携の在り方、これについて委員の皆さま方からご意見をいただきたいと思います。特別支援学校が地域と連携する意味、何をねらうのか、どのような連携が具体的に必要なのかなどについてご意見いただきたいと思います。

「既に」もありますが、「更に」の視点からお願いしたいと思います。特別支援学校以外の学校や幼稚園から考えると、どういうつながりが必要なのか。それぞれのお立場からご意見をいただきたいと思います。

委員

特別支援学校の地元は広範囲になります。地域への知らせ方がまだ下手なのかなと思います。知的障がいのある学校は作品展を学校外で開催しています。そういうことをきちんとやらないといけないと思っています。教育目標の中で「社会貢献」をどこまで念頭に入れているか、表現が出来ているかは、非常に大きなキーワードだと思います。実際に学校の中に入っただいて、学校を知っていただき、地域の中で育てていただけるような学校運営が出来ればと思っています。地域コーディネーター、公民館のコーディネーターともしっかり連携をとって学校の課題を見つけていくことも必要だと思っています。

特別支援学校が避難所になっているケース等もあると思います。地域と連携して避難訓練等を行うことも、地域に知っていただくという一つの手立てになるのではと思います。知的障がいのある特別支援学校と農業系の学校、専門学科がある学校との連携は、インクルーシブ教育システムの構築の指標になる取組ができるのではないかと考えています。

会長

地域貢献ということになると地域の方に「学校に入っていただいて」そこで一緒に活動していただきながら何が出来るのか考えるということですね。これまでは「出かけて行って」何が出来るのかを考えていたのですが、それにプラスするというイメージでよろしいでしょうか。

委員

学校がどのような役割を持っているのかを地域の方が知られないケースがあるのではないかと思います。学校に期待する姿もあると思いますが、小中高校に比べると、特別支援学校の場合は知られていないという現状があると思います。例えば学校が講座を開催するなどして、地域に知っていただく取組も必要だと思います。

委員

盲学校は点字講座を開き、地域の方たちが点字を習いに来ていらっしゃいました。その方たちが子どもさんたちに点訳したものを作ってくださり、学校に返してくださるという連携が出来ていたと思います。また、その方たちが学習発表の時にも手伝ってくださり、地域の中で連携が取れていました。地区の方たちがたくさん学校の中に入ってくださっていました。その地域に根ざした交流を行ってきたことにより、現在のような境のない交流が出来ていると感じています。地域の方が盲学校の子どもさんたちに声をかけてくださり、手を差し伸べてくださいます。地域に根ざしていくことはとても大切なことだと思います。障がい理解が図っていただけるととても良い取組だと思っていました。

会長

そのような活動をされ、地域の中に知っている人が多くなっていく。声をかけてくださる。理解が深まる。一緒にやることによっての子どもにとっての育ちみたいなものを感じられたことはありますか。

委員

特別支援学校の子どもさんも、小学校の子どもさんと交流することで、友達が増えたという意識が出ました。そして刺激を受けていました。盲学校は県内全地域からやってきて、人数も少ないので、子どもさんの中で学び合うという事が少ない学校ですが、交流で小学校に出かけることによって、大きな集団の中でいろいろな刺激を受けて、楽しみも増え、友達への意識も広がりました。学校の中では見られない姿も見られました。

委員

特別支援学校の場合、地域というのは複雑ですが、児童生徒の出身地域に対してどのよ

うな貢献をされているのでしょうか。

委員

特別支援学校の役割を知らせていくことについては、その子どもさんの居住地にある特別支援学校に期待をするところです。

委員

特別支援学校周辺の地域が交流の中心であり、遠くというのは現実ではないということですね。地元の小学校と何ヶ月に1回交流をされますが、これが地域なのか、何なのかと聞いていました。このことにより、他の障がいのない子どもさんが、障がいのある子はこういう感じだと知ることができます。また、そういう話を聞いた親御さんは何か気になることがあったら、こういう特別支援学校があると情報を得ることができるよい機会となります。反対に特別支援学校の子どもさんは、年に数回地元の小学校に行き、これが「地域連携」と言われると、その子どもさんにとってどういったメリットがあるのだろうかと気になっていました。将来的にその地域の小学校に転入する可能性があればメリットはあると思いますが、ずっと特別支援学校で過ごすのならば、どうなのかと気になっていました。

会長

居住地交流の意味合い、課題だと思います。居住地交流はいらぬとはなかなか言い切れませんが、学期に1回程度小中学校と交流して、それにどういう意味を持たせていくのかというご質問ではないかと思えます。

委員

いずれは地域へ帰って何らかの形で過ごすということが前提だと思います。居住地交流は自分の本来の出身地域の小中学校へということですが、地域の活動で一番中心となる場所は公民館だと思います。公民館へのアプローチや連携が、先を見据えた時にあってもよいと思います。

会長

学校の活動と居住地交流を公民館などと一緒にやるということですね。委員の発言の中でいずれその地域に帰っていくというのが前提とありましたが、いずれその地域で過ごす子どもさんたちが多くいます。例えば学校は違っても保育所・幼稚園は地元の所で通うということが多いと思えますが、そこと特別支援学校はどういう繋がりがあるのでしょうか。

#### 委員

園の方で直接的に特別支援学校の子どもさんとの交流はそんなにありませんが、進路を決めるときの見学であったり、いろいろな相談に特別支援学校の先生が来てくださいます。幼稚園から特別支援学校に入学しますと、見に行かせていただいたり、様子を聞いたりします。移行支援会議以外のところでの交流は大事だと思います。

小さいから分け隔てなく子ども同士がかかわれるよい機会であるので、話があればどの幼稚園も保育所も参加するであろうし、交流を大事にしていきたいと思っています。

#### 委員

私のところも特別支援学校との直接交流はありませんが、もし特別支援学校に入学する子どもさんがいる場合には、近くの同じ校区の保育所と交流をさせていただいたり、地域や学校の文化祭や、敬老会等に参加させていただいて、地元の方との触れ合いや、声のかけあい出来る環境を作っていくようにしています。障がいの有る無しにかかわらず、保育所にも広い地域から子どもさんが来られますので、それぞれの地域に出来る限りの交流をさせてもらうようにはしています。

#### 委員

公民館、地域への働きかけというお話がありましたが、土日に地域で過ごす事に関しては、保護者さんの頑張りがあってと思います。

特別支援学校には、小中学校で配られる地域のチラシとかは届きません。交流をしているとはいえ、地域から離れた場所にあるのだと感じたことがあります。

#### 委員

居住地交流の話がありましたが、高等部になるとゼロになります。高等部になると社会に出ることを考えますので、障害者就業・生活支援センターの方との連携が必要となってきます。関係を作ってくれる人ということになってくると、地域によって違うのかもしれませんが、それが障害者就業・生活支援センターの職員さんがキーパーソンになるケースが多いと思います。そういった方がたくさんいらっしゃればいいと思いますが、福祉の現場は、いっぱいいっぱいという状況だと思います。特別支援学校もアフターケアも行っていきますが限界があります。

#### 委員

特別支援学校の高等部から就労された後に、障害者就業・生活支援センターと繋がるようになります。就労支援会議を開いて、特別支援学校の方から自分たちも参加させてほしいと言ってもらっています。何ヶ月に1回会議を開いて、その職場の方や関係機関が集まり、企業の側から本人がどう頑張っているか、どんな事をこれからも育てていきたいか

ということをお話いただきます。その場に必ず特別支援学校の先生も入っていただいています。卒業後も特別支援学校がそういった形で関わってくださっています。障害者就業・生活支援センターでは、いろいろな関係機関と繋がりながら情報交換を行っています。

#### 委員

社会に開かれた教育課程という視点を、子どもたちの視点でみたらどうなるかということで少しお伝えしたいことがあります。

小中高の子どもさんたちが参加している青少年赤十字活動という会があります。そこで高校の生徒たちといろいろな活動の話をしていたなかで、生徒たちが「災害が起こった時に、障がいのある方と一緒に安全に逃げるには、どう支え、どう支援したらよいのだろう」ということを真剣に考えていました。高校生たちは、何が不自由で何が大変かをリサーチする場を「コミセンで」と言っていました。高校生にそのような感覚があると思うと、やはり公民館との繋がりは必要です。

特別支援学校と交流もある生徒もいると思います。交流でその現実を見ているから「どうしたら一緒に」という発想になったと思います。

#### 委員

地域との繋がりとということで話題になっています。もう少し福祉の制度として既に作られているものを学校サイドでも活用してもいいのではないかと思います。キーパーソ的な役割を果たしてくれる人はいないのだろうかとの話がありますが、既に相談支援専門員という相談支援事業にも関わっていただける職業の人たちはたくさんいらっしゃいます。その方たちは就学前から子どもさんに関わっています。就学後の学校の期間も相談支援専門員との関わりを常にキープしておく、高等部卒業後も必ず役立つ場面が出てくると思います。もう既にある制度を大いに活用して、連携していく体制は必要なんじゃないかと思っています。

#### 会長

ないものを作るのと同時に、既にあるものを使ってということですね。学校は意外と「何を」「どんな風に」「どこまで」というような話になるとわかりにくくなっている部分もあるのもしれません。

#### 委員

特別支援学校が身近にないことから、学校のことがよく分かりませんでした。先日学校見学をさせていただきましたが、私のイメージは30年ぐらい前で止まっていました。教育に関連した所においてもそれぐらいの情報しかありません。地域の方はもっと情報がないのだろうと思いました。

福祉の関係でずっと関わってきた子どもさんたちが、特別支援学校に入ったら、繋がりが途切れていると感じるところもあります。地域に帰った時にうまく繋いでいくのに学校側も地域側も苦勞するのが現状だろうと思います。

学校間の子ども同士の連携というのは、障がいの有る無しにかかわらず、関わった子ども双方の育ちが目標になると思いますが、地域に対しては認知してもらうこと、理解してもらうことが第一だと思いました。石見養護学校にセンター的機能としていろいろな面で世話になっていますが、それでもまだまだ知らないことが多いと感じています。ましてや他の特別支援学校についてはもっと情報がない状況です。周知していくことが大切かと思いました。

#### 会長

情報というのは受け手も興味がある情報とない情報があって、興味がない情報は流れていきます。情報の発信の仕方もありますが、どんなことが行われているのか現実を見てもらう事は大切かもしれませんね。

#### 委員

特別支援学校がある地域との連携と、出身地域との連携との両面があると思います。学校がある地域に対しては、開かれた教育課程で自分の出身の地域ではないけれど学校のあある地域で、体験や人との関わりを広げるといった役割があると思います。松江市の小学校、中学校の場合、地域のボランティアさんに学校の教育活動に関わっていただいています。地域ボランティアの方に学校に入ってもらいます。特別支援学校でもそういった取組も必要だと思います。

出身地域については、専門員の活用というお話がありましたが、更にもの方が繋ぐ先として地域には民生児童委員さんがいらっしゃいます。民生児童委員さんは担当する地区のどこにどの子がいるということを把握しておられます。キーパーソンとなる人だと思います。例えば民生児童委員さんの研修会等で特別支援学校の子どもさんたちの今であったり、将来であったり、進路であったりを分かってもらおうというのも一つの方法です。児童に関する専門の活動を行う主任児童委員さんがいらっしゃいます。せめてその方への周知は必要だと思います。

#### 議題 2

##### 事務局

医療的ケアの必要なお子さんの安全安心について説明

##### 委員

障がいの内容、必要とする医療支援の内容が非常に多様化しています。在宅・施設にか

かわらず親御さんのニーズも非常に多様化してきています。今後ますます医療ニーズが高まり、在宅志向が強まると思います。また、今までになかったような医療支援を要する子どもさんたちが全国的傾向として増えてくると思われます。島根県も例外ではありません。医療支援の提供体制を維持できるのか心配しています。看護師を始めとする医療人材が不足しており、医療体制がどこまで維持できるのか危惧しています。特に隣接医療機関のない益田養護学校は看護師が確保出来るのか心配です。西部地区は看護師自体が不足し確保しづらい現実があります。対策として学校看護師の身分の明確化が必要です。また、障がい児を支える支援者としての働き甲斐を若い看護学校の学生にどう周知していくか工夫が必要です。

制度的に医療人材をどう教育の場に獲得していくか、継続可能なシステムをどう構築していくか検討が必要です。島根県の場合は医師・看護師とも不足することが明らかです。医療機関は集約化の方向に向かっています。集約化された医療機関から必要な看護師をどのように確保していくかを考えていく必要があります。

#### 委員

隣接医療機関がない特別支援学校の場合、医療行為をするのに研修が必要だと思いますが、研修体制等はどのようなものですか。

#### 委員

基本的に看護師は主治医のところに行って手技と説明を聞きます。主治医との繋がりはありますが主治医と頻繁に会い説明を受けることは難しい状況です。

子どもの状態が変われば、その都度主治医のところに行って対応しています。

学校看護師同士の連携も必要となってきます。手技等について共有していくことが必要です。そのうえで保護者との連携も必要です。

#### 委員

看護師の定着率はどのくらいなのでしょう。また、勤務の形態はどのようなものなのでしょう。非常勤の場合はどのようなものになっているのかについて教えてください。

#### 委員

学校看護師の状況は、朝、通常に来て、打ち合わせを行い、何も起こらなければ17時に退勤です。子どもが来てから帰るまではずっと対応している体制です。

勤務年数としては長い人で10年以上です。

## 事務局

益田養護学校の学校看護師は常勤1名に加え非常勤は週24時間となっています。勤務年数に関しましては、勤務年数の長い方が出雲養護学校、松江清心養護学校、江津清和養護学校には1名、松江緑が丘養護学校には2名在籍しています。勤務年数は長い傾向があります。益田養護学校については勤務年数の長い方がいないので厳しいところがあるかもしれません。

## 委員

課題として「入学する直前にならないと実態がわからない」とありますが、直前とはどのくらいのイメージなのでしょう。就学前の教育支援委員会の委員もしていますが、そこに上がってくる子どもさんは教育支援委員会の審議が行われるまでには学校見学等されているケースが多くあると思っています。それでも遅すぎるのでしょうか。

## 委員

教育支援委員会にかからないケースや病院から直というケースがあります。過去に他の県から転院され、情報があがって来なかったことがありました。体制を組むために早め早めの対応が必要だと思っていますが、学校は就学の決定の段階でないと正式には動けないというもどかしさがあります。

## 事務局

次年度の体制を組んだり、学校看護師増員の検討に入るために早く実態が知りたいという学校側の思いがあるのではと思います。絶対にいつまでにという基準はありませんが、医療から教育まで情報が流れるようになるといいと思っています。

## 委員

就学を4月に控えた直前の2月ぐらいに、「どうする」ということもありました。

医療情報は第一級の個人情報であり、学校側が事前に情報を得にくい状況があります。学校側が早くキャッチするのは難しいと思われます。保護者の方に、よく理解していただき、教育機関、相談支援専門員等が子どもの医療情報を得やすくすることも必要なのではないでしょうか。親の了解が得られているかを確認しないと、医療機関としては、親以外の第三者に情報を勝手に渡すことは絶対に出来ません。親の了解を得やすくする努力も必要だと感じています。

## 委員

関わってきた子どもさんの場合は相談支援専門員さんがついていて、早期から療育を使われています。入院の子どもさんであっても訪問教育を受けるという話になると、必ず教

育支援委員会にかかっていたり必要があるので、把握している子どもさんについては、相談支援専門員さん、地区担当の保健師が親御さんと話をした上で、審議を申し込んでいただいて学校と連携をしています。

病院に対しても教育支援委員会の審議についての説明文書を教育委員会から送っているのので、入院のお子さんであっても審議は必要ということを周知しています。

会長

医療機関が知っていても親御さんがだめだと言われたら、情報は流れないということですね。いたしかたない話かもしれませんが、何とか情報を得やすくするようなシステムや、早くから関わる人にそういう役割をやってもらうということでしょうか。

委員

医療的ケアの必要なお子さんが特別支援学校に入るのか、病弱特別支援学級に入るのか、特に病弱特別支援学級を作ってほしいといった場合には、タイムリミットはおそらく8月末ぐらいまでです。それまでにいろいろな協議・相談を重ねるとすれば、年中さんまで、4歳までに就学の相談の体制が市町村にないといけない。キーパーソンは保健師さんだと思いますが。

松江市の例でいうとは3歳児健診に「エスコ」のスタッフが関わっています。3歳児健診そのものが松江市の保健センター、発達教育支援センターの所長の連名で出しています。実施主体に教育委員会が入っています。個人情報共有できるという整理をしています。このような市町村の体制作りが必要だと思っています。

会長

最初から情報を共有していく体制づくりが必要ということですね。情報共有していくこと、学校看護師さんを確保していくこと、ベテランと新しい看護師さんを重ねていくことのお話が出ました。遠隔教育の話がありましたが、これについてどう考えられますか。

委員

遠隔教育について松江緑が丘養護学校で実施しているとのことでしたが、もう少し詳しく教えてください。また県で遠隔教育について検討しているならばその方向性について教えてください。

事務局

松江緑が丘養護学校で行われているテレビ会議システムは、隣接している松江医療センターと有線で繋いで行っています。学校の機器を病院に持っていきセッティングすると学

校のモニターと繋がります。同時双方向であり、セキュリティーの問題もクリアしています。

現在、県ではセキュリティー上の問題があり遠隔教育が出来ない状況があります。教育委員会でワーキンググループを作って遠隔教育を含めてどういうやり方が出来るか検討している段階です。今すぐ遠隔教育が出来るというところまで進んでいないのが現状です。

#### 委員

子どもさんたちにとって有効な遠隔教育への道は遠いと感じました。ICTに関しては日進月歩であり、一年経つとどんどん新しいものが生まれていて、セキュリティーも強固になっていっています。もう少し新しい波を受け入れる検討をしていくことが必要なのではないでしょうか。特に島根の場合は急いで行うべきだと思います。

#### 委員

医療的ケアが必要で移動が難しい子どもさん、状況によっては感染症の流行している時期には学校に来ることが出来ない子どもさんもいます。学校に来ることが出来ない期間の学びを訪問教育とは違う形で整えることが出来ます。医療的ケアの必要な子どもさんに限らず全ての子どもさんが、日頃体験出来ないことを疑似体験出来たり、日頃会えない又は会える回数に限られている人と交流したりすることが出来ます。これから検討していかねばならない一つのシステムです。

### 議題3

#### 事務局

就学前の子どもへの支援について説明

#### 委員

保育所の立場から発言させていただきます。参考資料の図から改めて複雑な支援体制であると感じました。

現場の者が思う一番の課題というのは、「診断はないが支援が必要だと思われる子どもさんへの対応」、「保護者さんの障がいの受容が難しい。そのような保護者さんへのアプローチの在り方」です。

早期支援に繋がりたいのですが一番困難なのが、医療的な立場として保護者さんに伝えることです。診断はないけれど支援が必要な子どもさんはたくさんいらっしゃいます。現場の先生は何とか支援に繋がりたいと思っていますが、医療的な立場でとか、育ちの見通しを保護者さんに伝えるのに困難を抱えています。

保育所の看護師配置について、以前は乳児さんの数が9人以上いれば必要でしたが、今は義務ではありません。障がい児保育をしておりますが、看護師がいないとそういう子ども

もさんを受け入れることが出来ません。保育士も研修には行きますが責任が大きすぎます。保育所としても看護師さんを配置したいのですが、人もいないし、運営上の余裕もありません。子どもさんの安全を守るために保育士を加配しますがそれも難しいです。

小学校のように保育所にはコーディネーターというのがないので、そういった専門的な知識を持った方を配置は難しいかもしれないが、訪問という形で巡回指導とは別で来ていただければと思っています。

保育所の場合は入所される時に、学校や医療機関との個人情報の共有について保護者さんからの了承を取ります。小学校の先生が事前に年中児の時から訪問に来られますので情報が伝わらないということはあまりないと思いますが、先ほどのお話を聞いてまだ浸透しきっていないところがあるのかもと思っています。体制としては非常に細かくあるのだが、現場としては保護者さんに寄り添ったアプローチの仕方というところに悩んでいます。

#### 委員

町の支援に入っており、就学前の4・5歳児の巡回型の通級指導教室を行っています。週1回マンツーマンに指導をしています。子どもさんが少ない町ですので、町との連携がうまくいっているのもあると思います。5歳児相談会でピックアップされた子どもさんと、保育所から希望があった子どもさんを繋いでもらって療育をしています。毎週先生方と1～1時間半指導を振り返る中で、保育所の先生方はいろいろな指導もされているし、勉強をされていて知識としてはあるのに、目の前の子どもさんとどうかかわればいいのか、具体的に保護者さんにどう伝えたら上手く伝わるのか心配していらっしゃいます。その所に手が届いていないと感じています。保護者面談と一緒に参加したり、町の方も入れたりすると、ずっと繋がったりします。保護者さんの方からも「これは診断がつくものですか」との話があります。保護者さんもそういうお気持ちを持っていらっしゃるのがそこで分かります。

#### 委員

中学校でも発達障がいのある子どもさんに何とか支援をしてあげたいと思っています。思春期も伴い、二次障がいが出たり、学力も伸びなかったりと、もっと早く何とか出来なかったのかと思います。一般的な話は難しくても、成功例、モデルケースをもっとアナウンスしていただけると良いと思います。親御さんはどうやって、どのような道筋をつくれればよいのかが案外分からない場合が多いです。発達障がいの生徒さんを、1年かけて医療に繋がったこともあります。まずは保護者さんと本人さんの理解ですが、そこから保護者さんはどうしたらいいのか分からないので、事細かく支援をしたこともあります。県として「こうしてこうしたらよくなった」というのも必要では。

医療機関にかかるのに時間がかかります。何とかならないかと思っています。医療機関にも

っと気軽にかかれるようになればいいと思います。

#### 会長

支援が錯綜しているのが実際の流れなのですが、資料の支援図を示したとしても親御さんは何の事か分からないでしょう。親御さんに分かるような仕組み作りをしていくということ、分かってもらうための資料も必要ということかもしれませんね。

#### 委員

出雲市の取組について説明。

平成28年度に「育ちの応援シート」を作り、保護者さんとどう共有できるかを模索しながらやっています。「発達相談事業」により、年中になった時に各保育所、幼稚園から、「育ちの応援シート」を保護者さんに配布してもらいます。園での面談を実施し、必要な方については巡回相談や、面談に繋げています。「育ちの応援シート」は出雲市、出雲市教育委員会、市内の各幼稚園・保育所、市内の各小学校の4者共同実施という形をとっています。園の方で気になる姿がある子どもさんの情報を市にも情報提供いただいて、市も子どもさんの様子を見に行ったり、保護者さんがどういうふう子どもさんを受け止めていらっしゃるかといった情報を共有しています。

就学先を書かれたシートはそのタイミングで市内の小学校へ送る仕組みを作っています。保護者さんに対しては園との面談の機会を提供し、保健師や心理士に相談したいという方には対応しています。シートを通して小学校との情報共有のきっかけとしています。課題としましては保護者さんの理解があります。園での気になる姿と、家庭での姿が違っている方が多くいらっしゃいますので、まず園での姿を共有するきっかけとして面談を活用されるようにお話をさせていただく事もありますし、シートをつけることで保護者さんが心配感を持たれることもありますので、どう対応していくか相談を受けることもあります。

学校との共有の課題として、大規模校になると多くの保育所・幼稚園からシートが届きます。支援の必要な子どもさんだけではないため、業務が煩雑になり、学校側からは情報を整理できないか、園の見立てを聞きたいという声があります。

保護者さんが「受けさせられた」という支援は、支援ではないと感じることもあります。特に幼児期については保護者さんがその子をどう理解するのが大事だと思っています。シートにより保護者さんと面談させていただく機会や関係づくりを大事にしています。

#### 会長

育ちの応援シートは年中児の情報を家庭と園で共有して行って、子育ての話題をするための一つの道具ですね。そういったものを使いながら気づき、そして支援へ。教育の立場

でそこからどう切り込んでいくか。

#### 委員

以前、町で「子育て丸ごとサポートファイル」というのを作りましたとお話させていただきました。ここ数ヶ月運用していますが、そのファイルについては子どもさんが生まれられた時に保健師が保護者さんに渡しています。1歳になると子どもさんのほとんどが保育所に入るので、必ず保育所の担任の先生とチェックシートを確認し、どこまで出来るようになっているのか、どんな心配があるのかいうことをチェックしたものを持って健診に行き、保健師に相談するという流れをとっています。何の問題もなくそのまま子育ての記録として残っていく家庭がほとんどですが、なかには心配なケースや、障がい気づかれた場合には、それが次への支援に繋がるように使っています。

教育委員会も一緒になってファイルを作りましたので、保健師と保育所と教育委員会と学校の方に提出することになっています。

最初は保育所から負担感を言われました。お母さんも忙しいのにいちいち面談しないといけないのは、保育所にとっても保護者さんにとっても負担なのではないかとの声もありました。実際やってみると、忙しいお母さんとも、この面接の時だけはしっかりお話を出来る機会になるということと、若い保育士さんの研修のきっかけにもなっています。いろいろなお母さんの話を聞く、いろいろなケースを知ることで人材育成にもなるとご意見をいただいています。

#### 委員

出雲市さんの「年中児発達相談事業」が松江市の5歳児健診と似た形になるかと思えます。いろいろな事が分かっているのに集団の中では苦しさがあるという子どもさんの親御さんにとっては、「5歳児健診」「年中児発達相談事業」は集団に向かう一歩前のところの心配にこたえていく、いいシステムだと思います。

現場で長くやっていると、初期の気づきをフォローする必要性を感じます。保育所・幼稚園では「本当にうちで引き受けていいのだろうか」、「児童発達支援センター併用の方がこの子どもさんは伸びるのではないか」という迷いや、その子どもさんがうちで輝くには大きな集団がいいのだろうか、加配の指導員さんの配置が必要なのだろうか、その子どもさんの成長を見極めてどういう体制でいくのか考えます。

園や保育所からの気づきを保護者さんに伝える事はハードルが高く、保護者さんも受け入れがたいものがあります。そういった時に保健師、医療、行政の相談機関との連携で保護者さんの心を溶かしていきたいと思えます。面接の時に必ず、1歳半健診どうでしたか？3歳児健診で心配はなかったですか？と、特に丁寧に聞き、お母さんからいろいろな言葉を引き出すようにしています。

出雲市さんの「年中児発達相談事業」の中で心理士さんや保健師さんの相談があるのはと

てもいいことだと思います。

現場の保育士や幼稚園教諭は自分たちの保育によって子どもたちを少しでもプラスにこの思いがあります。幼児教育センターもたちあがったので、県の方でも現場への指導、アドバイスにも力を入れていただけると、子どものよりよい支援に繋がっていくのではと考えます。

#### 委員

特別支援学校の盲学校に関してです。盲学校は1歳から3歳までの来校相談が非常に増えています。3歳から5歳にかけて見える力が非常に伸びていくということもあり、盲学校さんもセンター的機能の教育相談の中で頑張っていると思いますが、島根県には幼稚部がありません。早期から受け入れることが出来ないことが特別支援学校の中でも課題となっています。全国に盲学校は67校あり55校が幼稚部を設置しています。中国5県のうち島根、岡山、鳥取が未設置です。視覚に障がいのある子どもさんの学びを保障するためにも盲学校に幼稚部を設置する検討も必要なのではないかと思っています。

#### 委員

以前、福祉、医療、保健関係のいろいろな会議に参加しました。その中で、例えば発達障がいの子どもの支援や相談について、それぞれがいろいろな事をやっていて、目指すところも同じなのに、何故これが上手く繋がらないのだろうというもどかしさを感じました。いろいろな支援がありますが縦割りです。市町村が支援とか相談の体制を規模や実態に合わせて、うまく繋がる仕組みを作る事が一番必要だと感じています。幼児期は保健・福祉、学齢期になると教育委員会、卒業すると福祉に戻っていくと考えると、教育委員会が頑張らないといけない。保健・福祉からしっかり繋いで、また福祉に繋いでいくという意識を持って教育がしっかり体制づくりを整えていかなければならないと思います。その中で親御さんにわかりやすい、ワンストップの窓口等を作っていくことが大事だと思います。先ほどの「子育て丸ごとサポートファイル」はいい取組だと思います。各市町村の体制づくりに県として何ができるかを考えていかなければいけないのではないかと思います。市町村の体制づくりのサポートをしていくことが必要だと感じています。

#### 委員

保護者へのアプローチの仕方が難しいとのお話が出ていましたが、これは保護者と先生との普段からの関係づくりが全てだと思います。普段、園から保護者さんへは、困ったことを伝える場合が多いのではと思います。保護者側は電話がかかってくると「今度は何をした？」と悪い印象を受けます。

親で発達が気にならない人はいないと思います。発達が遅れているのか個性なのか、もう少ししたら伸びるのか、気にかかる場所があります。そういう普段から気になっている

ことを先生から聞いたり、細かく説明してもらえれば、それについての親の返答もありますので、そこから保護者と先生の関係性が出来るのではないかなと思います。関係性のできた先生から話を聞くのと、関係のできていない先生から聞くのとでは、同じ内容でも全く印象が違います。関係づくりにも力を入れてもらいたいと思います。

先ほども言われましたが、県がいくらここで良いことを考えても市町村が動いてくれないければ、子どもたちのところには戻ってきません。しっかり市町村に動いてもらえるように、うまく仕向けるのも、県の、この会の役割だと思っています。